

領域「人間関係」と野外活動実習 —保育者養成校における科目間連携の方法について—

勝間田 明 子

1. はじめに

毎年4月、新入生オリエンテーションの際、学生たちの自己紹介で最もよく使われるフレーズの中に「わたしは人見知りなので、話しかけてほしい」というものがある。「人見知り」とは、発達心理学において「特定の人との情緒的な結びつきが強くなる」時期（生後6～7か月頃）の「見知らぬ人にたいして、不安や恐れをいだきその人を避けようとして泣いたり抵抗したりする」現象のことをいうが^{註1}、最近では、乳児に対してだけでなく、自分から他人と関わりを持とうというアクションが起こせない状況に関して、この用語が頻繁に使われているように感じられる。

ここで問題にしたいことは言葉の定義ではなく、保育科への入学者、つまり、保育者になろうと志す学生が「人見知り」であることを自認し、それをクラスメイトや教員の前で公言して、「（あなたのほうから）自分に話しかけてください」とコミュニケーションの主導権を相手に委ねようとする態度である。これは「自分から話しかけて拒否されるのは怖いので、積極的には動けない」ことを「人見知り」という言葉で表現し、「人付き合いが嫌いなわけではなく、既に受け入れる準備はできていて、自分は拒否しない」と表明することで相手からのアプローチを促している、と捉えることができる。また、この「話しかけてください」という言葉は、「だから自分のこともどうか拒否しないでほしい」という切実な訴えのようにも思われ、これまで受けてきた学校教育における条件付きの脆弱な人間関係が想起されて胸の痛くなるものである。

この状況を鑑みると、保育内容指導法の「人間関係」の学びは、もちろん子どもの人間関係の育ちを扱うものであるが、その前提として、こういった学生たち自身の人間関係を構築する際の消極性と傷つきやすさを考慮に入れ、授業内容を組み立てていくことの必要性が浮かび上がってくる。したがって、そのためには、①教員が学生自身の人間関係の築き方に対するイメージを掴むこと、そして、②そのイメージを学生自身が客観視すること、その上で、③仲間とともに活動することを通して既存のイメージを豊かにポジティブなも

のに変えていくこと、の3つを念頭に置くことが重要になってくるだろう。

さらに、保育内容指導法「人間関係」以外の授業とも同じ目的意識を共有して緩やかな連携を図り、学生がさまざまな授業を受講しながら、人間関係は意識的につくっていけること、そして、それは何度もつくりかえていけることを実感する体験を重ね、自らの人間関係のあり方に自信をもてるようになることが望ましい。

そういった問題意識の下で、本稿では、2018年度1年次前期開講の「スポーツとエクササイズ」の授業内で実施される野外活動実習において、当該授業の進行を妨げない範囲で実行できる教科間連携の方法を模索して行われたワークシートによる「人間関係」の学びについて考えてみたい。

2. 課題の設定

これまで本学で実施してきた野外活動実習のねらいを大別すると、①学生が五感を使って自然に親しむことによって学生自身の自然への興味を引き出すと同時に、②グループで課題に取り組み、仲間と深く関わる喜びを感じることの2つにまとめることができる。この両者、つまり、個人としての感覚や感性を磨きつつ、仲間と支え合い補い合いながら学習を進めていくことは、保育者養成校における学びの根幹であろう。

したがって、野外活動実習では個人の学びと集団の成員としての学びの両方を意識し、その重要性を実感できるようなプログラムを計画し、実施してきた。とくに、2016年におこなった野外活動実習の効果に関する調査によると^{註2}、先述の①のねらいに含まれる「五感」や「自然」に関する意識が実習後に高まっていることが看取できるが、②のねらいの指標となる「友人とのコミュニケーション」や「話し合いで意見」という項目をみると、実習前後で自身のコミュニケーションのあり方に対する意識にほとんど変化が見られなかった、という結果が出ている^{註3}。この論考では、事前・事後調査でその項目に変化がみられなかった理由を、プログラムの内容というよりは、むしろ調査方法、とくに、調査用紙の設問で使った言葉の選び方に起因するとし、それゆえ、調査方法の改良を今後の課題として挙げている^{註4}。

そこで、上述の課題意識を背景に、2018年度の実習は例年とプログラム内容を変えずに実施し、調査方法のみを変えることによって、実習での学びがどう変化するのか、という点を考えることとした。とりわけ今回は、グループ内の友人とのコミュニケーションの取り方に着目し、それが実習前後でどう変化したか、という部分に焦点をあてて検討を試

みた。

3. 研究の方法

(1) 調査の対象

本学 1 年次「スポーツとエクササイズ」履修者 166 名を調査対象とし、野外活動実習に出席した 166 名が事前・事後に記入し、実習後に提出したワークシート（図 1 参照、内容は後述）165 枚（1 名は課題未提出）を分析した。

(2) 野外活動実習の実施日時・場所・概要

野外活動は 2018 年 5 月 12 日（土）に、名古屋市東山動植物園（名古屋市千種区）にて実施された。この公園の広さは約 60ha、緑豊かな敷地は動物園と植物園、遊園地、東山スカイタワーを有している。動物は約 500 種、植物は約 7000 種が展示されており、豊かで美しい自然と季節の移ろいを実感できる施設である。なお、実習をおこなった 5 月 12 日は、一般の入園者に加えて、幼稚園や保育園の親子遠足や放課後学童クラブ等からの遠足で訪れる人で非常に賑わっていた。

野外活動実習は、授業内での事前指導（1 か月前および直前、合計 2 回）と授業 3 コマ分に相当する活動（グループおよび個人に課題が与えられる）で構成される。事前・事後指導の流れは、表 1 の通りである。

課題は、①遠足のプログラム作り、②動物のスケッチ、③ネイチャーゲーム、④歩数計測、⑤クイズラリーの 5 種類から成っている。

本稿で分析するワークシートは、

表 1 野外活動実習の事前・事後指導の流れ

日付	内容
4 月 12 または 13 日	事前指導①（授業内で数分程度） ・実習日時、概要、服装等の説明
5 月 10 または 11 日 （授業 1 コマ）	事前指導② ・実施要項の説明 ・課題用紙、チケット等の配布 ・グループ分け、ワークシート配布
5 月 12 日（土） （授業 3 コマ分）	野外活動実習当日 （9 時半～14 時半頃）
5 月 17 または 18 日 （授業 1 コマ）	事後指導 ・運動意識調査実施 ・ワークシートの提出

内容に関しては後で述べるが、直前におこなわれる事前指導の際に配布され、野外活動実習当日の集合時にいったん回収した。活動終了時に、実習後に記入する部分と提出日の確認をしたうえで再配布し、1 週間後に再度、回収された。

(3) 野外活動実習で配布した領域「人間関係」に関するワークシートの内容と目的

2018年度の野外活動実習で新しく実施したことは、これまで配布していた質問紙（運動に関する意識調査）に加えて、領域「人間関係」を意識することを促すワークシート（図1参照。実物はA4サイズ）を使用したことである。

このワークシートは、直前の事前指導の際、当日ともに行動するグループが決まった後に、一人一枚ずつ配布した。所属するグループのメンバー数は3から4名、その決め方は、これまでの交友関係の如何を問わず、じゃんけんを用いたゲームによる。

これを配布する際に、野外活動実習前のグループ間の人間関係を絵と言葉で描写してくることを宿題とし、

実習当日に記入済みのシートを持参して出欠確認時に提出するよう伝えた。そして、野外活動実習後におこなう再度グループの人間関係の状況を描くという課題、さらに、その変化の有無（「野外実習の前後でグループ内の人間関係に変化があったか（○をつける）あった・なかった」という質問に答える形式）と、変化した／しなかった理由を記述する課題が記されているため、課題をおこなうことを通して自身のグループの状況をみつめざるを得ないことになる。

このワークシートを作成した目的は、①教員のねらいを、物的環境（教材）を通して学生自身が発見する形で伝える方法を検討すること、そして、②その発見を学生自身が言葉によって切り取り、他者に伝える際に変質する場合があること、を明らかにしたいと考えた部分にある。

その背景には、学生たちの語彙力の不足があり、その貧弱な語彙に学生たちが「困って

野外活動実習 事前・事後調査 [領域 人間関係/意識の視点から]		2018年5月12日
学籍番号	名前	グループメンバー ()
【人間関係】 グループの人間関係について		
●絵・図・記号で表す 【野外実習前】	記入日: 月 日	●左に描いたものを言葉で説明する
【野外実習後】	記入日: 月 日	
①(特徴) ①野外実習の前後で、グループ内の人間関係に変化があったか。(○をつける) あった ・ なかった ②その理由(なぜ変化が生じたのか/生じなかったのか)を3つ考え、具体的に書いてみよう。 1) 2) 3) ③野外活動実習での経験(感じたこと・考えたこと)を答え、以下の2つの問いを考えてみよう。 ●子どもたちの人間関係を良くするために、保護者は何をしたらよいのか、どのようにふるまったらよいのか、書いてみよう。 ●子どもたちの人間関係を良くするために、保護者は何をしたらよいのか、どのようにふるまったらよいのか、書いてみよう。		

図1 ワークシート

いない」という問題がある。学生たちは他者に何かを伝えたり、説明したりする必要があるとき、それを描写するのにふさわしい手段を持ち合わせていないために、非常に単純化した形でおこなわざるを得ず、自身もその単純な言葉でしか記憶しないので、豊かな感動体験や学習経験が蓄積しないどころか、非常に平板なもの（リアクションペーパーで「考えたこと」や「感じたこと」として頻出する語句は「面白い／つまらない／難しい／わからない／わかりやすい／役に立つ」等である）となってしまうのではないか。したがって、同じことを絵と言葉で表現する場合の「違い」に気付くことが、言葉への興味や表現への関心を引き出し、これからの学びの一助となるのではないかと考えたのである。

そこで本稿では、この人間関係の変化に関する記載、とくに絵による表現と文字による表現の違い、について検討し、上述の2点を考えてみたい。

なお、続く設問では「グループの変化があった／なかった理由を具体的に3つ挙げる」、「（野外活動実習での経験をふまえて）子どもたちの人間関係を良くする／悪くする保育者の言動を考えて書いてみる」という2つの内容について、文章で回答することを課した。ここでは、人間関係についての自身の経験を、①保育者として、②領域「人間関係」の視点で捉え直すための流れを作ろうと試みたが、本稿ではこの部分に関する分析は扱わない。

4. 結果

提出されたワークシート165枚（165名分）の結果をみると、野外活動実習前後で人間関係の変化が「あった」と回答した者は95.8%（158名）、「なかった」と回答した者は4.2%（7名）であった。ただし「なかった」と回答した者と同じグループの他のメンバーは全て「あった」と回答しており、同じグループでも関係に変化が「あった」と捉える者と「なかった」と捉える者がいるということがわかった。

「（変化が）あった」には、①これまで話したことがなかった人たちと仲良くなった、②いままでも仲良しだったけれど、さらに仲が深まった、の2種類があり、前者が大半を占めている。そして、「（変化が）なかった」には、①もともと仲良しだったから、仲良しのままで変わらない（図2参照）、②少しは話せるようになったけれど、変化したといえるほどではない（図3、図4参照）、という2種類があり、「なかった」に丸をつけている場合も「全く変化していない」と捉えている者はなく、人間関係を表現する絵や説明書きをみると、その描写には変化がみられることに着目したい。

この回答からわかったことは、①「変化という語に対するイメージの違い」によって、

人間関係の見方が左右されたこと、そして②変化したかしなかったかを回答する「手段の違い」、つまり「二分法の言葉か、自由記述や自由な描画という違い」によって、答えが変わってくる、の2点である。

①の「変化という語に対するイメージの違い」とは、具体的には「より良くなったこと」を「(良いという点では) 変わらない」と捉える場合と、「少しだけ良くなったこと」を、「(積極的に変わったと言い切れるほどでもないから) 変わらない」と答える場合があったということである。②の「回答手段の違い」については、実際に描かれた図を用いて以下で詳述したい。

図2の説明書き(ワークシートでは絵の右側に書かれる言葉)には、実習前(上段)は「とにかく笑顔!! 明るい元気!!」とあり、実習後(下段)は「ただただ元気で明るかったのがまとまりのある元気のあるグループになりました!!」とある。その理由の一つに「もともと元気で明るかったから!!」と記しつつ、もう一つに「いろんな話をしてみんなのことが知ることができた!」と述べており、知らなかった一面を知ったこと、つまり、これまでよりも関係が深まったことを示唆する記述もある。

上下の絵の変化も明らかであり、実習前は正面を向いていた人が、実習後には中心を向いて手を繋いでいる様子が描かれている。これらを合わせて客観的に考えると「変化があった」と判断してよいと思われるが、この学生の場合、「変化があったか、なかったか」と問われたときに「変化がなかった」と回答するのである。なお、この調査では同様のケー

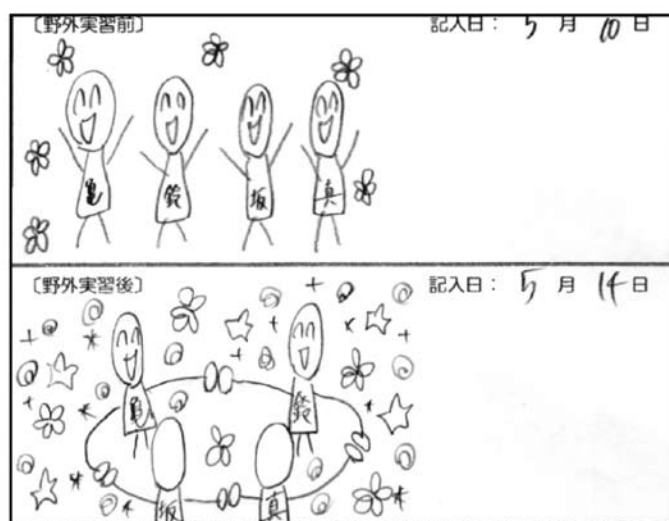


図2 もともと4名が仲良しだった班

スが3件あり、とくに絵の変化については一目瞭然であるにもかかわらず、「変化はなかった」と捉える学生がいることが明らかになった。

図3に示されているのは、もともと仲の良かった女子学生3名と男子学生1名が同じグループになった場合である。

この場合も、他のグループメンバー3名は関係に「変化

があった」と答え、「4人で仲良くなった」と記している者もいたが、この学生は「なかった」に丸をつけている。

ただし図3をみると、実習前(上段)には遠くに離れていた学生(男子学生を表現しており、他の3名とは異なり身体も描かれていない)が、実習後には同じ列に並んで描かれており、3名との距離が近づいていることが表現されてい

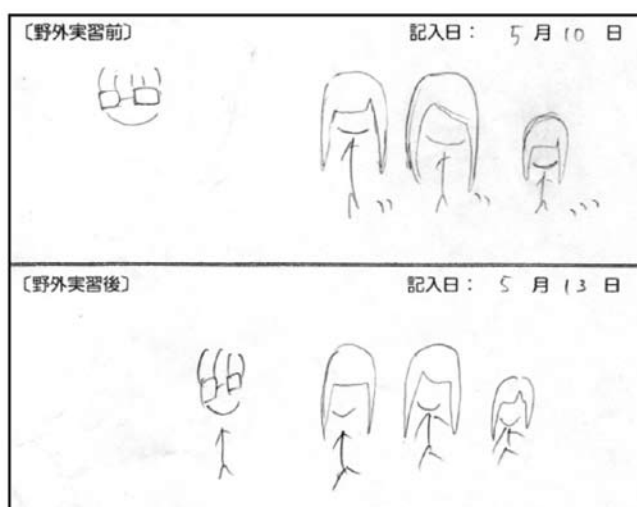


図3 仲良し3名に1名が加わった班

る。この絵をみると「変化があった」と捉えてよいと思われるが、この学生のイメージのなかの「変化」にはあたらないものだったことが窺われる。

これと同様のケースとして、もともと仲良しだった二組のペアが同じグループになり、その二人ずつで話すことが多くなってしまったために関係に「変化がなかった」と回答したものが2件あった。つまり、この場合も、描画表現によるとペア同士の距離自体は縮まっていることが示されており、変化が「あったか、なかったか」を選ぶ形式の問い方をされると、変化量が「小さい」場合にはその変化を捨象し、「ない」と表現する学生がいることがわかった。

5. 考察

ワークシート作成の目的の部分で述べたように、この教材を作成した目的は①学生自身が発見する形で教員のねらいを伝える方法の検討と、②その気づきを学生自身が言葉にする際に注意すべき点の析出であったが、このワークシートを用いた課題に取り組むことで、例年とは異なり、すべての学生が大なり小なり人間関係の変化を感じ取っていることが示されたが、「言葉」のみを媒介にしたコミュニケーションの場合、「同じ言葉(ここでは変化)」でもイメージの違いや解釈の違いによって、回答の違いを生むことがわかった。したがって、教材としてワークシートを用いる場合には、教員が提示して学生が応じるだけの一方向のコミュニケーションではなく、その応答された内容を題材にした対話により相互理解を深めていくようなあり方が求められていることになるだろう。

さらに言葉での表現と描画による表現とのズレが生じる可能性も明らかになったため、学生たちのリアクションを問うときに、観察したことや感じたことを表現する場合には、言葉だけでない手段を用いることの重要性が示された。このことを通して、描画や音楽、身体を用いて自分の思いを表現することの大切さを学んでいる保育者養成校であるにもかかわらず、表現系の教科でない場合はとくに「書き言葉」によって到達度や理解度の測定や評価に傾きがちなこと、そして、それによって切り捨ててしまっている学生の表現しきれない想いがあることに気付くことができた。今後は、学生の気づきや学びを書き言葉だけでない多様な手法を用いて表現できるような教材の工夫をしていきたい。

6. おわりに

このワークシートの分析を通して、「スポーツとエクササイズ」の授業として実施されてきた野外活動実習が、保育内容の領域「人間関係」のねらい「身近な人と親しみ、関わりを深め、工夫したり、協力したりして一緒に活動する楽しさを味わい、愛情や信頼感を持つ」という項目について、学生自身の実感を通して理解を深める経験にもなっていることが明らかになった。

ただし、その学びは、同じプログラムを組んで実習が行われたとしても、強く意識される場合とされない場合があること、とくに、これまでの野外活動実習と今回のそれとの違いを考えると、教材によって「視点」を提供することで、学びを方向付けられることが明らかになった。具体的に言うと今回の「視点」は「人間関係の視点」であり、ワークシートを通して学生たちが自然に自身の人間関係を見つめ、その学びを意識化できるようになった、と考えられるだろう。

なお、この「視点の提示」は保育現場における環境構成に通ずる行為であるが、保育者の願いをさりげなく環境（この場合は教材）に埋め込むことの難しさと面白さに繋がるものだと思う。養成校であれ、保育現場であれ、メッセージの受け取り手の状況をよく観察して把握したつもりであっても、いったんメッセージが発信者から離れたら、もう解釈は相手に委ねられるものである。理解に齟齬が生まれたときには、そのずれを修正できるような対話的な関係の構築が欠かせないことも付言しておきたい。

本稿では、科目間連携の一つの緩やかな形として、「スポーツとエクササイズ」における野外活動実習の経験を学生間で共有する経験とし、二年次前期開講科目である保育内容指導法「人間関係」の授業で事例として用いることを提起したが、このことは、2年次に

1 年前の野外活動実習を振り返ることで、当時は気づかなかったことを 1 年間に学習した知識を用いて再解釈する可能性や、1 年の間で変化した人間関係について思いを馳せる可能性が生まれることにも大きな意味があるだろう。

今後はこのワークシートを学生自身の対話的で深い学びにつなげていく方法を検討すると同時に、学生と教員、学生間の対話的な関係を築くための使い方を考えていきたい。

註

- 1 『保育用語辞典』第 4 版、273 頁、ミネルヴァ書房、2008 年
- 2 菊池理恵、野田さとみ『研究紀要』、第 38 号、名古屋柳城短期大学、185 ～ 190 頁、2016 年
- 3 同上、187 ～ 188 頁
- 4 同上、189 頁

A Study to Develop the Way of Focusing on Human Relationship through the Outdoor Activities Program

Katsumata, Akiko*

本稿は1年次前期開講「スポーツとエクササイズ」と2年次前期開講「保育内容指導法「人間関係」」の科目間連携についての検討と考察をまとめたものである。とくに、「スポーツとエクササイズ」の授業内で実施される野外活動実習において、当該授業の進行を妨げない範囲で実行できる方法を考え、ワークシートを用いて「人間関係」の視点を提示する方法を実施し、その結果を考察した。

この野外活動実習は昨年度、一昨年度と同じプログラムで実施されたが、その学びの内容は、一枚のワークシートによって大きく左右されることがわかった。今回はグループ内の友人とのコミュニケーションの取り方が実習前後でどう変化したか、という点に着目したが、前年度までは感想や気づきとして挙げられなかった「人間関係の変化」を、今年度は全ての学生が感じ取ったことがわかった。

また学生の持つ言葉のイメージの違いによって、同じ状況を表現する場合であっても、まったく逆の意味を持つ表現、具体的には「(少ししか)変化がない=(少しだけ)変化があった」、を用いることがあったので、学生の学びを表現する際には言葉による記述だけでなく、描画等の手段を用いる必要性も明らかになった。

キーワード：科目間連携，人間関係，野外活動実習，ワークシート，教材研究

*Nagoya Ryujo Junior College